

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H03081

研究課題名（和文）胸部食道がん術後長期サバイバーに対する日常生活支援看護モデルの構築

研究課題名（英文）The construction of daily life support nursing model to postoperative long-term survivor of thoracic esophagus cancer

研究代表者

森 恵子（Mori, Keiko）

岡山大学・保健学域・教授

研究者番号：70325091

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,670,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難の実態について明らかにすることである。言語的コミュニケーションに問題のない、胸部食道がんのために食道切除術を受け、術後5年以上経過している、研究への参加に同意の得られた患者に対して、研究者が作成したインタビューガイドをもとに、半構造化面接を実施した。Krippendorff（2001）の内容分析の手法を用いて分析を行った。分析の結果、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難として、【時間が経過しても変わらない食べにくさ】【時間経過とともに、食べにくさに慣れつつ新しい食べ方を模索し続ける】など、5つが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

食道がんに対する治療成績は向上したが、治療を終えたのち、治療に伴う様々な障害や、機能低下等を抱えたまま、長期間生存していかざるを得ないがんサバイバーも多く存在すると考えられるが、これまでその実態は明らかにされていなかった。本研究実施により、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難の実態について明らかになり、その結果をもとに、胸部食道がん術後長期サバイバーに対する日常生活支援看護モデルを構築することは、治療に伴う様々な障害や、機能低下等を抱えたまま、長期間生存していかなければならない食道がん術後患者のQOL向上につながることに本研究の学術的意義や社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to determine the difficulties in the daily life of long-term postoperative survivors of thoracic esophageal cancer. Semi-structured interviews were conducted with patients who had undergone esophagectomy for thoracic esophageal cancer, had no problems with verbal communication, had been postoperative for at least five years, and had given their consent to participate in the study, based on an interview guide developed by the researchers. A verbatim transcript of the interviews was prepared and analyzed using the content analysis method of Krippendorff (2001). The analysis revealed five difficulties in the daily life of long-term survivors of thoracic esophageal cancer surgery, including [difficulty in eating that does not change over time] and [getting used to test in eating over time while continuing to seek new ways of eating].

研究分野：周術期看護

キーワード：食道がん 長期サバイバー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2004年のがん対策基本法が施行されたが、悪性新生物による死亡者数は年々増加傾向にある。わが国における食道癌の動態は、罹患率は男性でゆるやかに増加傾向にあり、女性は横ばいである(国立がん研究センター)。また、2015年における食道がんによる死亡者数は11,739名で、男性では横ばい傾向に、女性では若干増加傾向にある(国民衛生の動向、2017/2018)。一方、診断技術の向上、治療の専門高度化、国民の健康に対する意識の向上等に伴い、がんに対する治療成績は向上したが、治療を終えたのち、治療に伴う様々な障害や、機能低下等を抱えたまま、長期間生存していかざるを得ないがんサバイバーも多く(近藤、2006)、食道がんの場合も例外ではない(国立がん研究センター がん統計'16)。

食道がんに対する治療の中心は手術療法であるが、がんの根治性においては優れている半面、手術操作が頸部、胸部、腹部と広域に及ぶため、手術を経験する食道がん患者は身体の形態機能において多様な変化が生じざるを得ない状態におかれる。中でも、わが国において最も発生頻度の多い胸部食道がんにおける頸部・胸部・腹部の3領域リンパ節郭清術に代表される手術術式の定型化および標準化による外科治療法の確立、さらにそれに基づいた鏡視下手術の導入の普及、加えて、近年、食道がんに対する治療は、手術に伴う身体的侵襲を軽減し、QOL向上を目指して、手術療法、化学療法、放射線療法を組み合わせた集学的治療が積極的に行われるようになり、治療効果をあげている(Zhang CD et al, 2013; Molina R et al, 2013; La TH et al, 2009; 松本ら, 2009)。食道切除術を受けた患者は術後の多様な変化をもたらす様々な不快症状や機能変化を抱えながら、時間をかけてそれらと折り合いをつけ、新たな生活を構築せざるを得ない状況におかれている。食道がん術後患者が抱える障害、機能低下等に関する様相及び、困難体験への患者の対処法については明らかにされつつある(森ら; 2012, Jaromahum J et al; 2010, Ewout F. et al; 2010, 森; 2007, 森; 2005)。また、食道がん術後患者のQOLに影響を与える要因に関する研究(Saito S et al; 2017, Malmstrom M et al; 2016, 2015, Wang L et al; 2016, Inoue T et al; 2016, Chang YK et al; 2014, Pool MK et al; 2012, Donohoe CL et al; 2011, Magrone G et al; 2006)が行われているが、いずれも、比較的手術後早期の患者を対象に研究が実施されているのが現状であり、胸部食道がん術後長期サバイバーを対象に、患者が抱える日常生活上の困難の詳細および、サバイバーのQOLについては明らかにされていない。治療成績の向上に伴い増加している胸部食道がん術後長期サバイバーのQOL向上を目指すには、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難の実態を明らかにするとともに、QOLとの関連についても明らかにした上で、日常生活支援看護モデルを構築することが重要と考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、胸部食道がん術後長期サバイバーに対する日常生活支援看護モデルを構築することである。胸部食道がん術後患者が体験する症状は複雑多岐に渡っており、特に、術後早期の患者の困難体験やQOLの様相については明らかにされつつあるが、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難およびQOLの様相は明らかにされていない。治療成績の向上に伴い増加している胸部食道がん術後長期サバイバーのQOL向上を目指すには、これまで明らかにされていなかった、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難の実態とQOLとの関連を明らかにし、その結果から、胸部食道がん術後長期サバイバーに対する日常生活支援看護モデルを構築することが重要と考える。

3. 研究の方法

平成 30 年度・平成 31 年度

- 1) 研究目的：胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難の実態について明らかにする。
- 2) 研究の対象と方法：言語的コミュニケーションに問題のない、胸部食道がんのために食道切除術を受け、術後 5 年以上経過している、研究への参加に同意の得られた患者に対して、研究者が作成したインタビューガイドをもとに、半構造化面接を実施する。対象者においては、再発・転移の有無は問わないものとする。
- 3) データ収集の場と対象者の予測：浜松医科大学医学部附属病院上部消化管外科外来および岡山大学病院消化器外科外来において、研究分担者から紹介を受けた患者とする。
- 4) 分析方法：面接内容の逐語録を作成し、Krippendorff.K (2001) の内容分析の手法を用いて分析を行う。分析に際しては、質的研究の専門家からスーパーバイズを受けるとともに、研究者間での繰り返しによる分析内容の確認を行う。

令和 2 年度

- 1) 研究目的：平成 30 年度・平成 31 年度の調査結果をもとに、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難を定量的に評価するための尺度を開発する。
- 2) 研究方法
 - (1) 平成 30 年度・平成 31 年度の調査で明らかになった、胸部食道がん術後長期サバイバーの生活上の困難の実態をもとに、胸部食道がん術後長期サバイバーの生活上の困難に関する質問票を作成する。
 - (2) 胸部食道がん術後長期サバイバー 20 名程度へプレテストを行ない、質問票の妥当性を確認する。
 - (3) 得られたデータから、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難を定量的に評価するための尺度を開発する。

令和 3 年度

- 1) 研究目的：胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難と QOL との関連について明らかにする。
- 2) 研究方法
 - (1) 平成 32 年度に開発した、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難を定量的に評価するための尺度と、EORTC QLQ-C30 (QLQ-C30) を用いて、胸部食道がん術後長期サバイバーに対して調査を実施する。調査票配布に際しては、対象者の基準(胸部食道がん術後患者で、術後 5 年以上経過しているもの、転移・再発の有無は問わない)に照らして、対象者を選定し、質問紙および依頼文書を郵送法にて送付する。
 - (2) 回収率向上のため、質問紙返送期限後に、再度依頼の文書を送付する。
 - (3) 分析方法：質問紙調査で得られたデータは、性別、術後経過日数、婚姻の有無、家族の有無、学歴、職業の有無に関しては記述統計を行い、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難を定量的に評価するための尺度と、EORTC QLQ-C30 (QLQ-C30) の関連については、多変量解析を行なう。

令和 4 年度

- 1) 研究目的：胸部食道がん術後長期サバイバーに対する日常生活支援看護モデルを構築する。
- 2) 研究方法：
 - (1) 平成 33 年度の研究結果をもとに、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難改

善に向けて必要な支援の構成要素とそれらの関連性を明らかにする。

(2) 胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活支援看護モデルを構築する。

4. 研究成果

1) 対象者の概要

胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難の実態について明らかにすることを目的に、浜松医科大学において5名、岡山大学病院において3名のインタビューを実施した。男性6名、女性2名で、平均年齢は68.5歳であった。胸部食道切除術後の経過年数は、術後5年から10年で、平均8.5年であった。

2) 胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難

インタビュー内容の逐語録を作成し、これを質的データとして、Krippendorff.K(2001)の内容分析の手法を用いて分析を行った。分析の結果、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難として、【時間的経過に経過に伴い、食事摂取時の感覚に慣れる】【時間の経過に伴う回復の実感】【健康に留意した生活を継続する】【再発・新たな部位へのがん発症への不安】【自分の経験を同病者に生かしたい】の5つが明らかとなった。

3) 胸部食道がん術後長期サバイバーの生活上の困難の5項目をもとに、胸部食道がん術後長期サバイバーの生活上の困難に関する質問票を作成するとともに、EORTC QLQ-C30(QLQ-C30)からなる質問紙を作成し、食道がん術後長期サバイバー20名程度へプレテスト実施し、質問票の妥当性を確認中である。新型コロナウイルス感染症の影響により、研究の進行に遅れが生じていることから、今後、プレテストの結果をもとに質問票の妥当性を確認したのち、胸部食道がん術後長期サバイバーに調査票を配布し、調査を実施予定である。質問紙調査で得られたデータは、性別、術後経過日数、婚姻の有無、家族の有無、学歴、職業の有無に関しては記述統計を行い、胸部食道がん術後長期サバイバーの日常生活上の困難を定量的に評価するための尺度と、EORTC QLQ-C30(QLQ-C30)の関連については、多変量解析を行なう予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Junko Honke Yoshihiro Hiramatsu; Sanshiro Kawata ; Eisuke Booka; Tomohiro Matsumoto ; Yoshifumi Morita ; Hirotooshi Kikuchi ; Kinji Kamiya ; Keiko Mori ; Hiroya Takeuchi	4. 巻 28
2. 論文標題 Usefulness of fitness tracking devices in patients undergoing esophagectomy	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Esophagus	6. 最初と最後の頁 260-268
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10388-021-00893-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 増田喜昭 森恵子	4. 巻 17
2. 論文標題 クリティカルケア看護におけるモニタリングの意味	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 クリティカルケア看護学会誌	6. 最初と最後の頁 69-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11153/jaccn.17.0_69	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高尾 昌資, 渡邊 浩司, 本家 淳子, 川田 三四郎, 平松 良浩, 森 恵子, 菊池 寛利, 神谷 欣志, 竹内 裕也, 山内 克哉
2. 発表標題 食道切除術後の合併症と術前身体機能との関連
3. 学会等名 日本食道学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 増田喜昭, 森恵子
2. 発表標題 クリティカルケア看護における モニタリングの意味
3. 学会等名 第17回日本クリティカルケア看護学会学術集会 2021年7月
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本家 淳子, 平松 良浩, 川田 三四郎, 高尾 昌資, 白井 祐佳, 森田 剛文, 菊池 寛利, 深澤 貴子, 神谷 欣志, 森 恵子, 竹内 裕也
2. 発表標題 食道癌周術期における術前活動量の術後経過に対する影響
3. 学会等名 日本食道学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 氏原恵子、森恵子
2. 発表標題 手術を勧められた若年性子宮頸がん患者の情報リテラシー向上のための育成プログラムの構成要素の検討
3. 学会等名 日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 本家淳子、森恵子
2. 発表標題 がん患者に対するwearable fitness tracking deviceの有用性に関する文献レビュー
3. 学会等名 日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森恵子、本家淳子
2. 発表標題 食道切除術を受けた患者が退院時に感じる社会復帰への思い
3. 学会等名 日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	雄西 智恵美 (Onishi Chiemi) (00134354)	大阪歯科大学・歯学部・特任教授 (34408)	
研究分担者	竹内 裕也 (Takeuchi Hihoya) (20265838)	浜松医科大学・医学部・教授 (13802)	
研究分担者	本家 淳子 (Honke Junko) (20824981)	浜松医科大学・医学部・特任助教 (13802)	
研究分担者	白川 靖博 (Shirakawa Yasuhiro) (60379774)	岡山大学・医学部・客員研究員 (15301)	
研究分担者	秋元 典子 (Akimoto Noriko) (90290478)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授 (34507)	
研究分担者	片山 はるみ (Katayama Harumi) (90412345)	浜松医科大学・医学部・教授 (13802)	
研究分担者	末田 朋美 (Sueda Tomomi) (90553983)	岡山大学・保健学域・助教 (15301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------